

檜垣 立哉著

『バロックの哲学——反—理性の星座たち』

(岩波書店、2022年)

真珠には、数ある宝石のなかでも際立った特徴がある。それは、真珠が生物に由来する宝石であることだ。真珠は、^{マザーオブパール}真珠母貝の軟組織に異物が侵入したとき、軟組織を守るため、貝殻の成分が異物の周囲に分泌されることで形成される。それゆえ、天然の真珠の多くは真円ではなく、核となる異物の形状によって多様な形で産出される。こうした歪な形状の真珠は「バロックパール」と呼ばれ、真円の真珠同様、宝飾品として人気を誇っている。

やや唐突に思われたかもしれないが、まさにこの「歪んだ真珠 (barocco)」から転じた「ある種の均整からの逸脱」こそ、本書の鍵語である「バロック」が意味するものである。

では、本書における「バロック」的思考、「逸脱」した思考とは、どのような思考なのだろうか。本稿ではこの問いを軸に、本書で論じられる思潮について考えてみたい。

本書には、十九世紀と二十世紀を生きた十人の思想家が登場する。取りあげられるのは、坂部恵、ジル・ドゥルーズ、ヴァルター・ベンヤミン、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、ホセ・オルテガ・イ・ガセット、ウィリアム・ジェイムズ、チャールズ・サンダース・パース、西田幾多郎、九鬼周造、そして補論で扱われるクロード・レヴィ＝ストロースである。特に、ともに「バロック」の語を冠する著作を残した坂部とドゥルーズは、他の思想家を論じる際の参照項として、本書の議論における中心的な役割を担っている。坂部およびドゥルーズの議論との交錯によって、これら諸思想が有するその「バロック」的性格が露わになるのだ。では、その「バロック」性とはどのようなものだろうか。本書の記述からは、少なくとも二重の意味での「バロック」性が看取できるように思われる。

第一に挙げられるのは、哲学史におけるマイナー性、すなわち主流からの「逸脱」としての「バロック」である。本書で紹介される諸思想は一見したところ多岐にわたるが、著者の見立てによれば、これらの思想は十九世紀の新カント派の思想を基礎としている点で軌を一にする。カント思想を引き受けつつ批判した新カント派に基づく以上、これらの思想はカント的統覚中心主義に反対するものとなる。その結果、これらの思想は、カント主義の後継者たる現象学や合理性を旨とする分析哲学が「メジャー」として鳴り響く二十世紀においては、かき消されそうな調べとして「マイナー」の位置に甘んじることを余儀なくされた。このように、本書に登場する諸思想は主流から逸脱した傍流としての「バロック」的性格を有している。

第二の意味は、「バロック期」の哲学を継承しているという意味での「バロック」である。先述の通り、本書で紹介される諸思想は十九世紀の新カント派を下敷きにしている。それゆえ、これらの思想は新カント派が取り入れたライプニッツ主義、ネオモナドロジーとも言える思考をも受け継

いでいる。ネオモナドロジエ的思考は、(著者も言うとおりの、ライプニッツ思想自体との連関の正否については留保がつくものの)バロック期の無限小を見る微分の思考に依拠しつつ、個と普遍との関係を、個が普遍を含みこみ、普遍へと連続してゆく関係性、すなわち「モノド」として描こうとする。このように、「モノド」概念をひとつの範型として思考を展開していく点で、本書に登場する諸思想は「バロック期」思想の系譜に連なっている(偶然ではあるが、差異を内に含みこむ「モノド」の概念自体、「バロック」の原義である真珠を思わせるものでもある)。

かくて、本書で紹介される諸思想は「カントの統覚中心主義に対するアンチテーゼと、それ自身多様で、微分的な差異を含みこみ、その問題こそを問題とする思考」(9頁)と表現される。つまり、精緻な合理性という「均整」からはみだしつつ、個や部分が普遍や全体を包含するという「振れた」関係、論理矛盾的な関係を描き出そうとする思考こそ、本書の描く「バロックの哲学」である。このような哲学は、理性の光がおよばない「歪」で「薄暗い」領域を必然的に肯定する。この意味で、本書が提示する思想群はダイヤモンドのごとき明晰判明な思考ではなく、異他的なものの不透明さを含む、まさしく「バロックパール」のような思考と形容できよう。こうした哲学は、本書副題にもあるように「反—理性」的とも捉えられる。しかしそれは、けっして理性の価値をおとしめるものではなく、むしろ理性によってこそ見出しうるような彼方の領域に挑む、そうした思考であろう。

さて、本書で論じられる思想群を「バロック」的思想と捉えることで、何が見えるのだろうか。それは、近現代哲学史の「メジャー」と「マイナー」の位置をめぐる「カント的統覚中心主義」と「新カント派」との弁証法的運動だろう。本書は、二十世紀の「メジャー」の潮流のなかでは心許なくこぼれてしまう諸思想を十九世紀の新カント派への依拠という点でつなぎ、それを「バロック」の語で表現することで、もうひとつの「マイナー」として提示している。これによって、二十世紀に断絶したかに思われた十九世紀諸思想の系譜が現代までつながり、近現代哲学史が「新カント派」から「カント的統覚中心主義」へ転調していく様が見えてくるのだ。

著者も述べているように、十九世紀的思考は、二十世紀の思潮を引き受け、それに抗するような哲学を考えるうえで、大いに示唆を与えるものとなる。それゆえ、本書のように十九世紀的思考の系譜をたどり、二十世紀のより精確な哲学的状況を描き出す試みは、哲学に携わる者が二十一世紀の課題と向き合ううえで重要な役割を担うだろう。

一方で、本書が区分する「メジャー」と「マイナー」の二つの潮流の間に、相反しつつ連続する「バロック」的関係を想定することはできないだろうか。つまり、「マイナー」哲学の要素を含む「メジャー」的思想、あるいは「メジャー」哲学の要素を含む「マイナー」的思想の可能性は期待できないだろうか。たとえば、二十世紀に「メジャー」となっていた現象学や分析哲学に属するとされる諸思想のうちにも、それらを批判し、それらから逃れようとする思想があるはずだ。そうした思想は、本書において「マイナー」とされる「バロック」諸思想と、どのような連関をもつのだろうか。こうした可能性を検討することもまた、二十一世紀における諸哲学の「転調」や「変奏」を見ていく際に、重要な営為となりうるだろう。

以上のように「バロック哲学」という系譜を検討する本書の内容は、八年の長きにわたる連載の実りであるが、著者はさらにそれ以前の著作から「バロック哲学」の系譜の可能性を提唱していた。

檜垣 立哉著
『バロックの哲学——反—理性の星座たち』

このことから、本書が著者の長年の問題意識とその研究の成果であることが見て取れる。著者の問題意識の結実たる本書の研究が今後、多くの研究者による議論に付され、さらなる発展を見ることを期待したい。

(押見 まり)